三重大学教育学部研究紀要　第54巻　人文・社会科学　(2003)　117 − 123 頁

大学生におけるジェンダー特性語の認知 (2)
― 性分類反応からみた 1970 年代と 1990 年代の比較 ―

湯川　隆子・廣岡　秀一

The Transition of Gender Cognition for The Last Twenty Years in Japanese Students (2)

Takako YUKAWA, Shuichi HIROOKA

Abstract

This study examined the transition of gender (sex-role) cognition for the last twenty years in Japanese students. The assumption was that their cognition of gender traits had changed towards equity and androgyny. Data were collected in the1970s and the 1990s. Different samples of 1,000 college students (about half were females) participated in each time period. The questionnaires consisted of fifty adjectives that represented typical gender personality traits in Japanese culture during the 1970s. Participants in each group were asked to classify each stimulus trait into four categories, that is, male stereotyped traits (M), female stereotyped ones (F), both male and female ones (androgynous, MF), or neither (N). The data were analyzed by Hayashi's third method of quantification. Through this analysis, 4 axes were extracted. The first axis was named "MF − M/F". The second one was named "Traditional − Reversal". The third one was named "M/MF − F". The fourth one was called "F − M/MF". A mean score of each 4 axes was submitted to a 2 (Time Period) × 2 (Sex) analysis of variance. Main results were as follows. The significant differences between 2 time periods were found in all the 4 axes and significant sex differences were found in only the first and third axis. The significant interactions of time period and sex were found in the first, third and fourth axis except the second one. Through the above analyses, three main results appeared. First, the classification in the 1970s based on the traditional gender (sex-role) stereotypes decreased and the androgynous classification increased in the 1990s. Second, some reversal classifications also were found, that is, some typical male traits in the 1970s were classified into female traits in the1990s. Third, the change of cognition from traditional towards innovative and androgynous had taken place more remarkably in male students than in female students. Despite this progress of male students, female students still always had a slight lead. The reasons of these changes were discussed.

問　題

「両性性 (androgyny)」という画期的な概念が Bem, S. L. (1974) によって提唱されたのは 1970 年代であった。だが当時はまだ依然として、いわゆる伝統的な性役割 (ジェンダー) ステレオタイプが先進諸国においても多くの人に支持されていたと思われる。事実、青年や成人を対象に行われた欧米の研究では、性に関する強固なステレオタイプが広く存在していたことが認められている。Broverman, I. K. ら (1972) は、それまでに自身らが行ったものも含めて、米国でのいくつか

の調査を概括し、性別、年齢、宗教、結婚の有無とその様態、教育水準などの違いにかかわらず、人々から一致して男女各々に求められている性格特性が存在することを確認している。そのような望ましい特性とは、男性では、「独立的」、「論理的」、「客観的」、「行動的」、「競争的」、「攻撃的」、「支配的」、「野心的」、「素早い決断力」、「自信のある」、「リーダーシップのある」、「仕事のできる」といった"有能さ（competence)"に集約されるものであった。他方、女性では、男性的特性をもたないことと、「優しさ」、「他人の気持ちに敏感な」、「温かな感情表現ができる」、「如才のない」、「信心深い」、「きれい好き」、「文学や芸術に関心をもつ」、「外見を気にする」など、主に"温かさと表出性（warmth & expressiveness)"に代表される特性であった。

つづいて、1980年代はじめにはWilliams, J. E. & Best, D. L.（1982）による大規模な調査が報告されている。かれらは、25ヶ国の男女大学生を対象に、300個の形容詞を提示し、それぞれの国において、各々の形容詞が、どの程度男性もしくは女性に結びついているか、あるいは男女両方に結びついているか、つまり、どのような形容詞が男性または女性の特性を意味しているかを調査した。その結果、全ての国に共通して男性を意味するものと判断された形容詞は6個あった。それらは、「冒険好きな」、「支配的な」、「力強い」、「独立的な」、「男性的な」、「つよい」であった。それに対して、女性を意味すると考えられている特性は、「感情に動かされる」、「従順な」、「迷信深い」の3個であった。さらに、25ヶ国の内、19ヶ国で一致したものになると、男性については49個、女性については25個に上った。

上述のような性別ステレオタイプの認識における当時の欧米をはじめとした諸外国での傾向は、わが国で行われた同種の研究結果においても支持されている。柏木（1967；1972）は、成人および大学生男女を対象とした調査から、男性については、"活動性"と"知性"の二次元に代表される諸特性が（「活発な」、「積極的な」、「頭がよい」、「理性的な」、「背が高い」、「経済力のある」、「意志強固な」、「個性的な」、「自信のある」、「女性をリードする」、「現実的な」など)、他方、女性については、"美と従順"の一次元（「気持ちの細やかな」、「おしゃれ」、「行儀よい」、「愛情豊かな」、「かわいい」、「従順な」、「容貌の美しい」、「男性に依存的な」など）に代表される諸特性が、1960年から1970年はじめの日本における典型的な性別ステレオタイプと見なされていることを指摘している。つづけて1970年代後半になされた調査においても、このような傾向は確認されている（伊藤（1978)、湯川（1979))。

以上のように、欧米においても、またわが国においても1970年代当時には、「男らしさ・女らしさ」のステレオタイプが世界共通に普遍的といえるほど強固に存在していたといえる。

それから20年近くを経た現在、社会状況のさまざまな変動や推移は人々の生活のありようやさまざまな価値観・信念を変貌させたといわれる。男女に関わる価値規範や通念についても例外ではないと思われる。伝統的な規範に則った性別意識から性にとらわれない平等主義的あるいは両性性的な意識へと変化しつつあることが示唆されている。事実、最近提示されているいくつかの研究結果は、1970年代当時のステレオタイプ的な認知傾向を必ずしも支持しない方向にある（McBroom, W.H.1987; Lewin, M. & Tragos, L. M. 1987)。わが国においても、伝統的性別分化意識から平等主義へと推移していることを窺わせる研究結果が提出され始めている（東・鈴木，1991; 鈴木，1997など)。

そのような状況を鑑みれば、人々の「男らしさ・女らしさ」、すなわちジェンダー特性語に対する認識にも何らかの変化を認めることができるのだろうか。Bemらの主張をはじめ、フェミニズムの視点からなされてきた性差や性役割に対するさまざまな再検討や問題提起は何らかの効果をもちえたのであろうか。

そこで本研究では、1970年代と1990年代の2時点で実施された同一調査の結果を比較することによって、ここ20年の間にわが国の青年（大学生）のジェンダー特性語についての認識がどのように変わったか、すなわち、伝統的な性別ステレオタイプを支持する傾向が減少しているか否かを検討する。

方　法

＜調査内容＞

1970年代、青年や大人の性役割意識や男女の性格特性のステレオタイプを見るためには、主としてMMPIのMf尺度（1969）やGoughのCPI

のFe尺度（1964）などに代表される性役割尺度やインベントリーが使用されていた。そこで、これらの尺度をはじめ、国内外の性度および性役割尺度の調査項目から、男性的性格特性と女性的性格特性を表すとされていた形容詞特性語50個を選び質問票を作成した（湯川，1991）。これはTable1に示した50項目を「男性のほうによりあてはまる特性（M）」、「女性のほうによりあてはまる特性（F）」、「男女両方ともにあてはまる特性（MF）」、「男女両方ともにあてはまらない特性（N）」の4カテゴリーのいずれかに分類することを調査協力者に求める方法で、ジェンダー特性語に対する認識を調べるものである。

＜調査協力者および手続き＞

調査協力者は国・公立および私立の四年制大学の学生である。上記の質問紙調査を1970年代（調査の時期は1975～1978年）に1060名（女性491、男性569）に、そして、1990年代（調査の時期は1991～1996年）には別サンプルの972名（女性516、男性456）に、集団で実施し、比較検討した。所要時間は約100分であった。

結　果

1．数量化Ⅲ類による分析

1970年代と1990年代のそれぞれの時点での調査協力者によって4カテゴリー、すなわちM, F, MF, Nに分類された50項目のうち、Nを除いた3カテゴリーについて両時点を込みにして林の数量化Ⅲ類による分析をした。第4軸までを抽出し、さらに、ケース得点を算出した。抽出された4つの軸は以下のようであった。

① 第1軸「MF－M or F軸」: MF反応を（＋）とし、FあるいはM反応を（－）とする軸で、男・女という性別の次元で分類反応をするか、

Table1 List of Gender Traits

1	活発な	26	行儀のよい
2	自信のある	27	指導力のある
3	つよい	28	複雑な
4	かわいい	29	こまかい
5	冷たい	30	仕事に専心的な
6	謙遜な	31	くどい
7	頭のよい	32	感情的な
8	よわい	33	敏感な
9	線の太い	34	無頓着な
10	積極的な	35	明るい
11	理性的な	36	おしゃれな
12	従順な	37	質素な
13	依存的な	38	愛情豊かな
14	外向的な	39	家庭的な
15	政治に関心のある	40	でしゃばりな
16	美しい	41	静かな
17	きちんとした	42	つき合いのよい
18	忍耐強い	43	理想をもった
19	激しい	44	のんびりした
20	視野の広い	45	勝手な
21	気持ちのこまやかな	46	現実的な
22	大胆な	47	独創的な
23	経済力のある	48	神経の細かい
24	学歴のある	49	話上手の
25	意志強固な	50	粗略な

それとは関連ない別の次元で反応するか（例えば、男女の別なく人間一般の性格特性として考える、あるいはどうするべきかわからなくてMFに分類するなど）。

② 第2軸「Traditional（伝統的分類）－Reversal（逆転分類）軸」：伝統的反応を（－）とし、それと逆転した反応を（＋）とする軸（例えば、「つよい」、「経済力のある」を伝統的男性特性と分類する場合は（－）得点になるが、これを女性的特性と分類する場合には（＋）となり、逆転反応と解釈される）。

③ 第3軸「M or MF－F軸」：Mもしくは MF反応を（＋）とし、F反応を（－）とする軸で、従来のいわゆる「男性性－女性性」の対極的二分性を表す軸とみられる。

④ 第4軸「F－M or MF軸」：F反応を（＋）とし、MもしくはMF反応を（－）とする軸で、第3軸と対称性を示す。なお、第3，4軸ともにMF反応はM反応と近接している。

なお、50個の特性語のうち、M，F，MFに分類された特性語が4軸上においてどのように布置しているかをFigure 1に示した。図作成上の限界のため、1～3軸上でプロットしてある。

2．4軸各々の年代と性についての分散分析

上記にあげた4軸それぞれの年代別のケース得点の平均をFigure 2（1）～2（4）に示した。4軸各々について、年代（2）×性（2）の2要因の分散分析を行った。Table 2に示した結果は次のとおりであった。

① 第1軸については年代、性ともに主効果が有意であり、1970年代より1990年代で、かつ女子のほうが男子よりも平均得点が高い。さらに、交互作用が有意であり、1990年代になると男女間の得点差が小さくなり、男子の得点の上昇が目立つ（Figure 2－(1)）。

② 第2軸については年代の主効果のみが有意であり、1970年代より1990年代で平均得点が高くなっている。性の主効果は有意ではなかった（Figure 2－(2)）。

③ 第3軸については年代、性ともに主効果が有意であり、1970年代の方が1990年代より、かつ、男子のほうが女子よりも平均得点が高い。また、交互作用も有意であり、1990年代には男女間の得点差が開き、男子は依然としてM反応が

Table 2　ANOVA of Case Score

（F値）

	年代	性	年代×性
第1軸	96.07***	35.85***	3.86*
第2軸	34.01***	1.14	0.07
第3軸	8.67**	417.08***	8.14**
第4軸	108.94***	1.01	4.54*

*p〈.05，**p〈.01，***p〈.001，df＝(1, 2016)

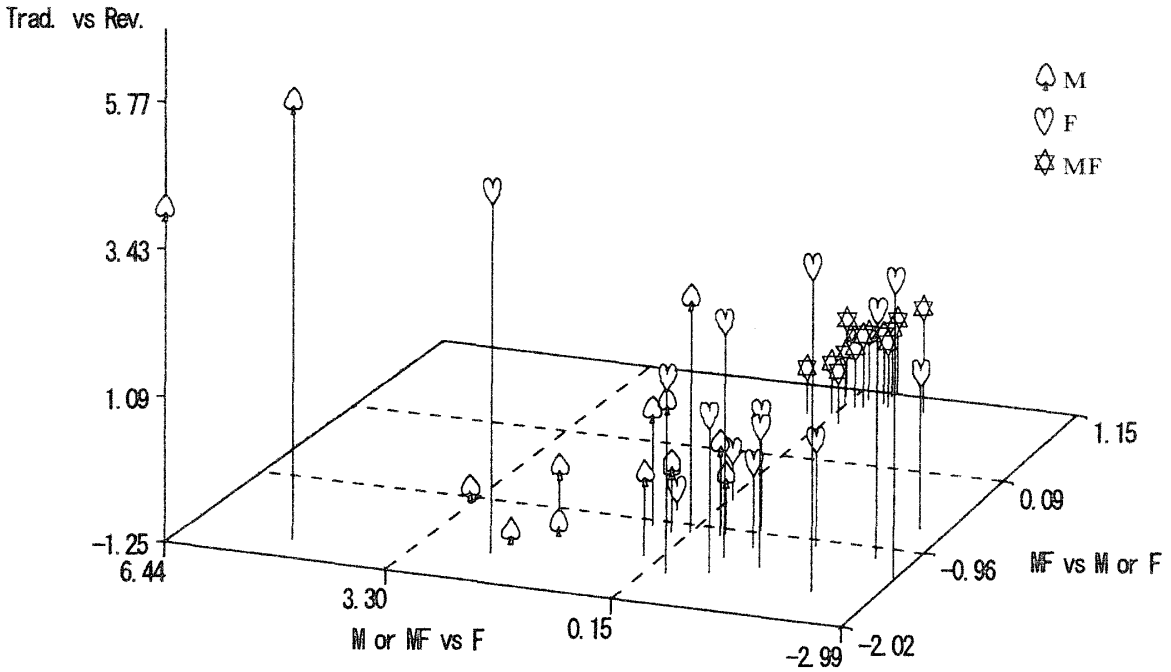

Figure 1　Scatter Plot of Traits

高いのに対して、女子の下降が目立ち、F反応がさらにつよくなった（Figure 2－(3)）。

④　第4軸については年代の主効果が有意であり、1970年代より1990年代で平均得点が高くなっている。また、交互作用が有意であった。すなわち、1970年代では女子の得点が、1990年代では男子の得点が高くなるという傾向がみられた（Figure 2－(4)）。

討　論

およそ20年をおいた2時点で、大学生男女を対象にしてジェンダー特性語についての同一調査をした結果、以下のようなことが明らかになった。

まず、時点による変化については、1990年代になると、性の次元における伝統的な男性特性の優位性、つまりジェンダー規範が男性中心に構成され、より明瞭であることが減少するとともに、男とか女という性別を基準にした分類自体が減少した。性にもとづいて分類する場合でも、従来は男性特性とされていたものを女性特性とする反応が優勢になった。また、これについての性差をみると、2時点での変化は男子により顕著で、結果として男女差が縮まった。しかし、伝統的規範意識からの解放という点では、男子ではそれほどではなく、女子により明瞭であった。このような結果を、近年の他の研究で示されている諸結果の中から、本研究と関連する部分に関して比べてみる。

Williams, J. E. & Best, D. L.（1994）は、約15年前に実施した先の調査結果（1982）について再

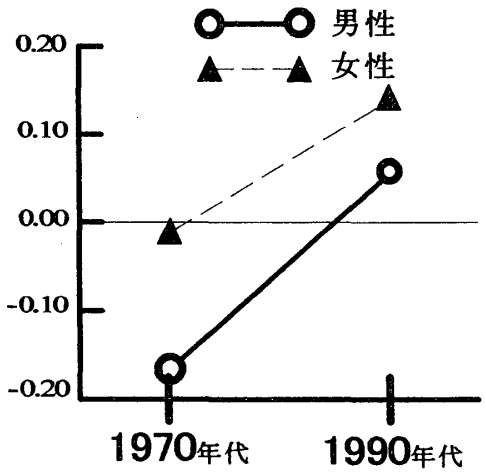

Figure 2－(1)　第1軸

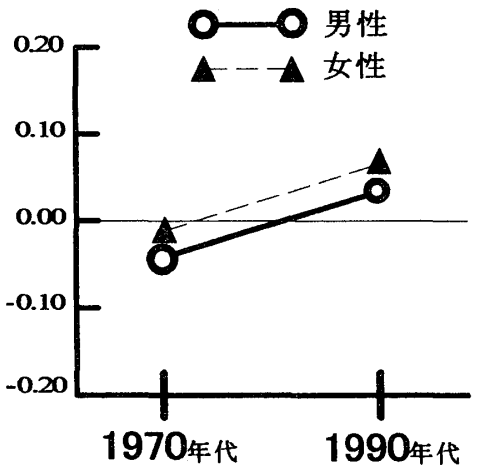

Figure 2－(2)　第2軸

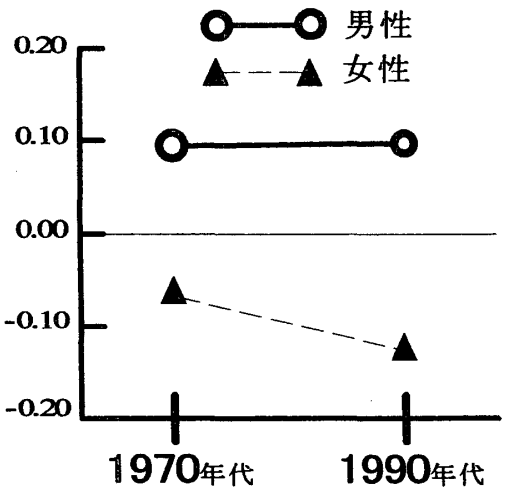

Figure 2－(3)　第3軸

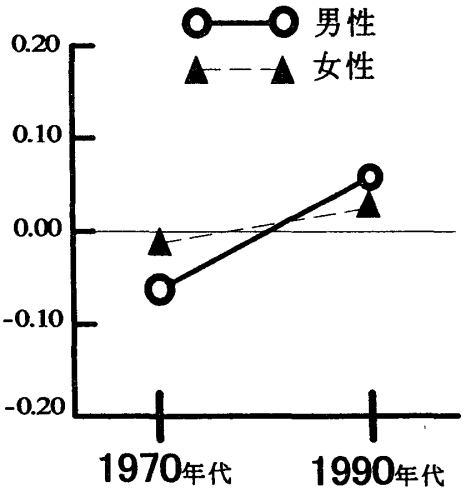

Figure 2－(4)　第4軸

分析を加えたり、さらに発展させた調査を幾つか行っている。先に報告した資料について、"affective meanings（感情的意味構造）" の点から再分析を行った結果からは、調査した全ての国で例外なく、男性により結びついているのは、"strength（つよさ）" と "activity（活動性）" であったが、"favorability（好ましさ）" については通文化的なパターンは見られなかった。つまり、性役割ステレオタイプは予想されているほど普遍的なものではなく、文化によるバリエーションが見られたというものである。すなわち、日本、南アフリカ、ナイジェリアにおいては、"favorability（好ましさ）" は女性よりも男性に結びついているが、他のイタリア、ペルー、オーストラリアなどの国では、女性のほうにより結びついていた。また、宗教的には、カトリックの国よりもプロテスタントの国で男女特性の分化が強かった。さらに、14 か国の男女大学生に実施した性役割イデオロギーについての調査結果からは、ほとんどの国で、女性のほうが男性よりも幾分近代的かあるいは平等主義的な見方をもっていることが明らかになった。

Lewin, M. & Tragos, L.M.（1987）は、1956 年からおおよそ四半世紀を経た時点（1982 年）において、フェミニスト運動が青年（高校生）の性役割態度に影響を与えたか否かを検討したが、顕著な変化は見られず、1956 年当時に比べて、1987 年時点で伝統的な性役割態度が減少しているとはいえなかった。しかし、高校生女子においては、1956 年に比して、女性であるという自己の性に対する不満が減少しており、女子の自己イメージが良くなっていることがわかった。

さらに、McBroom, W.H.（1987）は、1975 年から 5 年後の 1980 年にかけて、3 つのコホート（調査開始時の1974年当時，大学程度の教育レベルをもつ 40 代，30 代，20 代の男女 3 コホート）を対象に縦断的な比較研究を実施した。結果は、男女ともに明らかに伝統的な性役割意識の減少を示していたが、女性の変化のほうがより大きいこと、さらに、家庭内の性役割についての女性の態度は、一貫して平等主義的傾向にあることを示すものであった。

わが国についてみると、東・鈴木（1991）による、わが国の性役割に対する人々の態度変化についての研究展望が注目できる。日本人の性役割態度は、1970 年以降、特に 1978 以後男女ともに平等主義的な方向に変化し、男女の役割の区別が薄れてきていることが明らかであり、とりわけ、高学歴、管理職/専門職の若い女性が平等主義的態度をもつ可能性の高いことが指摘されている。

本研究で得られた結果を、上述した欧米、さらにはわが国でなされた諸研究の結果と対照すると多くの点でよく一致しているといえる。1970 年代からおよそ 20 年を経た 1990 年代現在、青年におけるジェンダー認識は変化し、伝統的な性別ステレオタイプを支持する傾向が減少していることは明らかだといえる。

結　論

1970 年代と 1990 年代の 2 つの時点を比較すると、大学生の性の特性についての分類が、性別を意識し、伝統的なステレオタイプに沿った認識から、ステレオタイプひいては性にとらわれない認識へと変化していることがわかった。また、性差も小さくなっていることが明らかになったのである。

同一課題で 20 年近くを隔てて比較するという方法によって、「両性性」の概念がめざしていた男女のあり方を支持する方向へ、少なくとも意識においては、変化していることが明らかになった。この結果は、伝統的な性別規範を前提として進められてきた性役割の発達研究に根本的な変更を促す一つの有力な証拠を提供するものといえるだろう。

文　献

- 東清和・鈴木淳子　1991　性役割態度研究の展望　心理学研究、62、270-276。
- Broverman, I. K., Vogel, S. R., Broverman, D. M., Clarkson, F. E., & Rozenkrantz, P. S. 1972 Sex-role stereotypes: A current appraisal. Journal of Social Issures, 28, 59-78.
- 伊藤裕子　1978　性役割の評価に関する研究　教育心理学研究、26、1-11。
- 柏木恵子　1967　青年期における性役割の認知　教育心理学研究、15、193-202。
- 柏木恵子　1972　青年期における性役割の認知 II　教育心理学研究、20、48-58。
- Lewin, M. & Tragos, L. M. 1987 Has the feminist movement influenced adolescent sex role attitudes? A reassesment after a quarter century. Sex Roles, 16, 125-135.

- McBroom, W. H. 1987 Longitudinal change in sex role orientations: Differences between men and women. Sex Roles, 16, 439-452.
- 鈴木淳子　1997　レクチャー社会心理学 Ⅲ 性役割－比較文化の視点から－　垣内出版。
- Williams, J. E., & Best, D. L. 1982 Measuring sex stereotypes: A thirty-nation study. Beverly Hills, CA: Sage.
- Williams, J. E., & Best, D. L. 1994 Cross-cultural views of women and men. In W. Lonner & R. Malpass (eds), Psychology and culture. Needham Heights, MA: Allyn & Bacon, 191-196.
- 湯川隆子　1979　性差　日本児童研究所（編）児童心理学の進歩 1979 版、18、金子書房、237-265。
- 湯川隆子　1991　性役割特性語の再検討　三重大学教育学部研究紀要（教育科学）、42、109-118。
- 湯川隆子　2002　大学生におけるジェンダー（性役割）特性語の認知－ここ 20 年の変化－、三重大学教育学部研究紀要（人文・社会科学）、53、73-86。